



「学び」の世界

大学院文学研究科 教授 木田章義

北条家の家訓に「好く道より破る」というものがある。これは「好いた道から、身の破滅が生じる」という意味のようであるが、あるいは、「すきもの」の「すく」で、管弦遊楽、恋い狂いなどの古い意味の「すき」からの連想が働いておれば、「遊楽から身の破滅」が生じるという意味かもしれない。どちらにせよ、人生訓としては立派に役立つものである。ところがこういう家訓の一節を、序文や講演に引用してもあまり感心されることがない。しかし、『論語』の「後生長るべし」というような一句は、序文や講演に引用されると、格段に格調が高くなるとされる。これは、日本に於いて長い間、漢文が教養の基本であったことによる、我々の意識のなせるわざである。その一節が、和文から出たものか、漢文からでたものかが重要なのであって、その内容の当否が基準になっているのではない。明治時代以来、漢文だけでなく、欧米の格言を引用すれば、また格調が上がるようになっていたが、最近では、英語はやや陳腐という感じになりつつある。フランス語の警句などを引用すれば、やはり文化の香りが高いと評価される。こういう場面で、スワヒリ語やアラビ

ア語を使う人は皆無である。京都大学に於けるさまざまの会議の中では、フランス語やドイツ語は知っている人間の数が少ないせいもあって、あまり聞いた



ことがないが、英語は頻繁に出てくる。私のように英語に縁の無い人間には、知らない単語や明瞭に理解できない単語もよく出てくる。運良くその単語の意味を質問することができる場合もあるが、次々と発言が繰り返され、質問する機会を失したまま、帰ってくるということもある。私のようにすごすごと帰る人もきっと何人かはいるはずである。特に、大学全体の会議には英語の使用が多いようである。英語にある種の権威を感じているからであろう。とにかく、このような外国文化に対する敬慕は、奈良時代から一貫して日本文化の中にあつた。それが現在でも続いているのでわかるように、日本の文化は、いつも、外国文化を受け入れて、それを

基本として発達してきた。「学ぶ」ことが、文化の基盤にあるのである。

本年度の附属図書館公開展示会では、その「学び」を主題として開催した。日本における「学び」は、中国文化、禅文化、朝鮮文化、キリシタン文化、西欧文化など、いくつか指摘できるが、本年度5月に、附属図書館蔵『幼学指南鈔』が重要文化財に指定されたので、この書籍を中心に展示会が組み立てられ、中国文化をいかに「学んだ」という展示を行うことになった。この『幼学指南鈔』というのは日本で作られた書籍で、中国の典籍に出てくる重要な単語や固有名詞などを掲出して、中国の文学書・歴史書の典拠となる文を抜き出して集めたもので、いわゆる「類書」と呼ばれるものである。現在なら「百科事典」に近いものである。この書籍は、本来は全三十一巻であるが、その内の二巻が本学附属図書館に蔵されている。そのほか、陽明文庫を始め、台湾の故宫博物院などに分蔵されているが、もとは覚瑜という人物の所持本がバラバラに散ってしまったものである。久安三年（1147）という年号が中に現れるので、その頃の成立で、大江時房という人物が幼い頃に与えられたものではないかと言われている（詳しくは展示会図録「学びの世界」の中島貴奈氏解説参照）。

『幼学指南鈔』は、漢詩文を作るときや、中国典籍を読むときなどに必要な知識を能率良く身につけることができるように編纂されたものである。このように漢詩文を読解するための必須単語や知識をまとめたものとして、『和名類聚抄』（源順著、931～938年）や『口遊』（源為憲、970年）なども知られている。これらも、貴族の子弟のために編纂されたものである。このような類書や辞書が編纂されるというのは、漢詩文をたしなむ層がひろがったことと、漢詩文を読み、書くための必須の知識の範囲が限定できるようになったことを示している。類書に

掲載された文献の範囲の知識があれば、日本で必要とされる知識の大意は得られ、その知識があれば、日本での漢詩文作成には問題がないということである。『幼学指南鈔』は、奈良時代から平安時代にかけての、日本における漢文の知識の広がりや限界をも示していると考えても良いだろう。



幼学指南鈔

この展示会では、第一部で、中国を中心とする出版文化、第二部で、『幼学指南鈔』を中心とする類書・幼学書の世界、第三部では中国典籍の消化という三部で構成した。これを別の表現をすれば、第一部は、日本が中国文化を受け入れた背景、第二部は、受け入れる際の書物の選択、そして第三部は、受け入れたものの消化（日本の変容）を展示したと言い換えても良い。この展示を見ると、日本文化がいかに中国文化の影響を受けているのかがよく理解できる。同時に、現在残されている量は限られているが、いかに多くの本が、中国の版本そのままの形で日本で出版されていたか、また、それらの難解な中国語をさまざまな方法を用いて読解し、講義していた様子が明らかになるように展示されていた。ただ、展示会という性格上、現在残されている典籍を展示することしかできないので、この展示会では、中国文化をそっくり模倣している姿、それを日本的に変えたとしても、あくまで中国典籍の理解という形では、日本

文化は発達してこなかったように見えるであろう。まるで、日本文化はすべて模倣によって成り立っているように見えるのである。

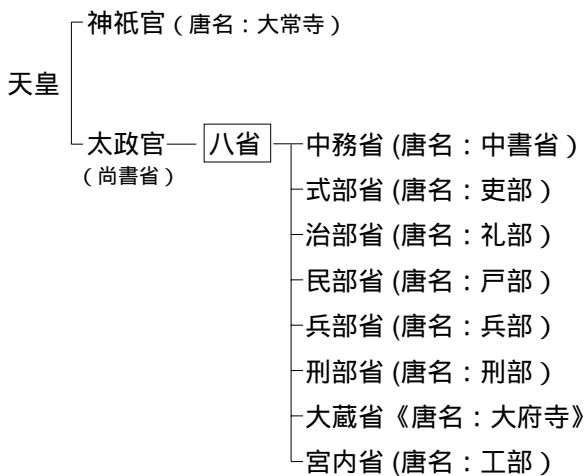
ところが、子細に検討して行くと、日本人の「学び方」には一つの特徴があることが分かる。外国文化をそのまま受け入れていることはごく

「学びの世界」展示資料

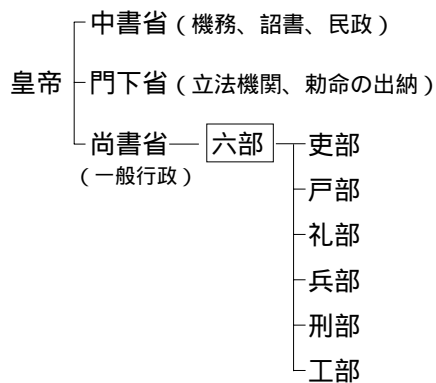


希で、かなりの変形をさせつつ受け入れているようである。たとえば、律令制度についてみれば、律令制度そのもの、土地の管理法、文書のやりとりなどは、確かに中国の模倣であるが、その官僚制度は、

大宝令



となっている。しかし、唐令は、唐令



九寺：太常寺（礼儀）、宗正寺（宗室）、光禄寺（膳羞）、衛尉寺（軍器杖）、太僕寺（輦輅厩牧）、大理寺（鞠獄定刑）、鴻臚寺（賓客）、太府寺（倉蔵出納）

という形で、三つの役所に分けて職務を分担さ

せて、皇帝が統治する形であった。日本では、神祇官と太政官の二つに分けているが、神祇官は政治的には大きな力を持たないので、実質的には、日本の統治組織は天皇 太政官という形で、権力が集中しているのである。これはおそらく当時の政治体制を反映しているものであろうと思われる。ここをとらえて上山春平先生は『埋もれた巨像』（岩波書店1997年）という藤原不比等を中心にした国家論を展開されているのである。大日本帝国憲法が三権分立の形式をとっていても、天皇制を維持するために、実際には形式的なものにすぎないものであったのも、当時の実情を反映しているのである。

日本文化に大きな影響を与えているものとしては、仏教もある。この仏教についても様々な宗派があり、一概には言えないのであるが、仏教の中では重要な思想である「輪廻」の思想は、表面上は日本文化の中では盛んに語られているが、実際には、ほとんど入っていない。輪廻の輪を抜けるための修行ではなく、国を守るための修行であり、浄土に移動するための修行なのである。それがはっきりとした形をとったのが、鎌倉仏教である。親鸞の教えの中には、全く輪廻という発想はない。これが日本人にはわかりやすく、また、信じやすい形であったのである。そして親鸞の主張の中に、輪廻を否定する言説が無いところからみても、輪廻という思想は、真剣な信仰の中では、当時でも語られることがなかったことを示している。彼が否定しなければならなかったのは、自力で悟りを開こうとする宗派からの阻害だけであった。

漢詩文の世界も、日本文学に大きな影響を与え続けているが、漢詩文の中の風論詩は、ほとんど日本漢詩の中で詠まれることがない。漢詩の理論やそれを借りた和歌の理論の中に、「風論」という技巧は入れられているのであるが、風論詩を書いた日本詩人はほとんどいない。不遇を述べても社会批判は行わず、花鳥風月を賞で、庭を散策し、酒を楽しむという体になる。

日本文化の中の、外国から入ってきた骨格部分については、見事に、日本的な受容を行っていることが分かる。

このように、物を中心に見た場合には、はっきりと見えないけれども、その棄てた部分を見ていけば、日本人は中国文化の根幹部分をも変更しつつ受容していることが分かる。実は、これは明治に盛んに言われた「和魂洋才」に近い受け入れ方である。日本人固有の精神をもって、西洋伝来の学問知識を利用するという方式で、中国文化に関しても、「心は日本、技術は中国」という形で受け入れているのである。つまり、日本人は、明治時代になって初めて「和魂洋才」という方法を編み出したのではなく、中国文化を受け入れたときに、すでに「和魂漢才」という形で受け入れていたと考える方が良いでしょう。ちなみに、「和魂漢才」という言葉は『菅家遺誠』から始まるといわれている。前後の文章を引用すれば「凡そ国学の要する所、古今を論渉し、天人を極めんと欲すると雖も、其れ、自づから和魂漢才に非ずは、其の閭奥（奥深い所）を闚ること能はず」（統群書類従本）とある。菅原道真著とも言われ、鎌倉時代の奥書のある写本があるようであるが、その奥書が信用できるかどうかは疑わしく、内容から見て、成立はもっと新しいものではないかと思われる。しかし『菅家遺誠』は幕末に版本として刊行されたので、「和魂漢才」という言葉は明治にはよく知られていたらしく、この言葉をもとにして「和魂洋才」という言葉が作られたようである。文学のような、実生活とは離れた部分での中国文化の影響は、嘗々と続くのであるが、実生活や社会体制に関係するような思想なり、制度については、かなり巧みに換骨奪胎して受け入れ、その当時に実際に権力を握っていた人間達が、自らの既得権を生かすように、少なくとも減らすことのないように工夫しながら受容してきたのである。仏教のような思想の場合で

も、現実感のある所までしか受け入れていなかったと言うべきであろう。

千年後、日本地域で発掘が行われ、多くの埋蔵物が出現し、それを分析した学者たちは、日本はアメリカにずっと占領されていたと解釈するかもしれない。あるいはアメリカと同じような文化や思想を持っていたと思ひこむかもしれない。しかし現実には、アメリカ的に進む方向ではあるが、「和魂米才」であることを、我々は

よく知っているのである。日本人の「和魂」は根強いと言うべきであろう。

最後に、展示会には国宝級の典籍から未紹介の資料まで、まことに価値の高い文献が、豊富に展示され、一大学で、これほどの展示を行えるのは京都大学くらいだろうと、専門の方々から高評を得たことを付言しておく。

(きだ あきよし)

附属図書館について思うこと

京都大学大学院工学研究科材料工学専攻
修士課程1年 柴田 暁伸

先日、久しぶりに附属図書館に行きました。思えば学部にも所属していたころは試験期間になると決まって附属図書館で勉強しており、結構身近に感じていたような気がします。しかし大学院に進むと研究室に自分の机がもらえ、わざわざ附属図書館まで行くことがなくなっていました。

そこで感じたことは、自分は今まで純粋に本を借りに附属図書館に行ったことがないということです。附属図書館には勉強をしに行くだけでした。つまり図書館=自習室という考え方なのです。附属図書館にいる利用者の中にどれだけ純粋に本を探しに来ている人がいるでしょう。ほとんどの利用者が図書館=自習室と考えていると思います。なぜそう思うのでしょうか。それは図書館が静かで勉強に適しているという

ことでしょう。それは図書館の長所でもあると思うのですが、少し寂しい気もします。

私はほかの国立大学の附属図書館には行ったことはないのですが、比較することはできませんが、京都大学の附属図書館は世界に誇れる図書館だと思います。ですがそんな図書館も私は単なる自習室のひとつとしか考えていませんでした。もし他に勉強をする環境の整った自習室ができれば、間違いなく私がそちらのほうに行くと思います。

先日私は附属図書館にある本を探しに行きました。その本は既に絶版となっておりどこの本屋にも存在していませんでしたが、附属図書館で見つけることができました。そのときの感動は今も鮮明に思い出すことができます。そこで私が感じたのは図書館の価値というものは利用者の数ではなく、やはり蔵書の質、量であるということです。自習のためのスペースよりは蔵書の充実のほうが大切なのではないでしょうか。(しばた あきのぶ)

京都大学所蔵の高山寺本 書物と目録

大学院文学研究科 助教授 大槻 信

1 はじめに

2002年秋に開催された平成14年度京都大学附属図書館公開展示会「学びの世界 中国文化と日本」の準備にいくらか関与した。訓点本を中心に出品品を選定したのだが、まず困ったのが京都大学所蔵の訓点本もしくは仏典古鈔本のリストがないことである。吉澤義則・遠藤嘉基という京都大学の学者によって、訓点本全体の目録である『点本書目』が編まれているにもかかわらず、京都大学所蔵の訓点本の完全なリストは存在しない。京都大学点本目録の必要性を痛感した。さらに言えば、京都大学仏書目録・京都大学版本目録・京都大学善書目録のようなものが編まれることが望ましい。

目録は研究を益することが大きい。しかし、近代以前の古目録は、何も後世の学者の便宜を思って作成されたものではない。学びの蓄積、蔵書の増加に伴い、あるいは社会全体における書物の集積に伴い、それらを整理し、管理・記録する為に生まれたものである。それらの目録は、当時の学問文化状況をはじめ、様々なことを教えてくれる。とりわけ、現存しない書物について調べる際には、最大の情報源の一つであり、また、所蔵場所が変更された書物について調査する時にも、有益な手引きとなる。

そこで、現在京都大学に所蔵されている高山寺旧蔵本を中心に、書物と目録の関係について考えてみたいと思う。というのも、高山寺では中世以来その経蔵本について多種の目録が作成されており、鎌倉時代以降、現在に至るまで、各時代における典籍の概要を把握することが可能だからである。

高山寺は京都市右京区梅尾にある古刹であり、一般には紅葉と鳥獣戯画、華嚴宗祖師絵伝などによって知られている。平安時代中期に創建され、その後、神護寺の別院であったのが、

建永元年（1206）明恵房高弁（1173-1232）が後鳥羽上皇よりその寺域を賜り、華嚴・真言兼学の寺として再興した。中世以来の学問寺として知られ、収蔵する典籍が質量を兼備した一大コレクションであることから、経蔵本は「高山寺本」としてつとに名高い。その多くが現在まで同寺に伝来し、収蔵の典籍文書のすべてが重要文化財に指定されている（国宝指定を含む）、一部山外に出たものがあり、京都大学収蔵本もそれに該当する。

2 高山寺の経蔵と目録

古代日本の目録といえば、

日本国見在書目録（藤原佐世撰。ca.891成立。）

通憲入道蔵書目録（编者未詳。成立年未詳。

藤原通憲1106-1159。）

本朝書籍目録（编者未詳。鎌倉末期成立。）

などが著名であろう。しかし、これらは漢籍、あるいは国書の目録であって、内典（仏書）は含まない。仏書の目録には、一つに請来目録があり、一つに経蔵目録がある。ここで取り上げようとするのは、高山寺の経蔵目録である。

高山寺では、鎌倉時代以降たびたび経蔵の整理・調査が行われた。その整理に伴って、経蔵目録が作成され、また、典籍の表紙に経蔵名・函番号などが記入された。有名な「高山寺」朱印の押印もその様な整理作業の一つである^{〔図1〕}。

奥田1985、宮澤2002によって、高山寺経蔵の歴史と目録との対応を見る。



図1 高山寺朱印
『曼荼羅次第法』より

高山寺草創期には、東西二字の経蔵があった。東経蔵には一切経一部、大般若経一部、真言書十二合等を収蔵し、西経蔵には（唐本）一切経一部、五部大乘経一部、大般若経一部、章疏等百合等を収蔵していた。

明恵没後二十年を経た建長年間にこの経蔵の調査・整理が行われた。その際に作成された目録が、

- a 『高山寺聖教目録』(建長二年(1250)、高山寺典籍文書綜合調査団1985所収。)
- b 『高山寺経蔵聖教内真言書目録』(建長三年(1251)、高山寺典籍文書綜合調査団1985所収。)

である。後者は真言関係書を、前者はそれ以外を集録している。

東西経蔵以外にも、法鼓臺道場(高山寺内の説法所)に収蔵された聖教があり、その目録が、

- c 『法鼓臺聖教目録』(鎌倉時代中期、高山寺典籍文書綜合調査団1985所収。)

である。以上が建長・文永期の第一次収蔵体系である。

それ以降、鎌倉・室町時代に、経蔵の変更や、房舎の変転があった。まず、経蔵自体が東西二字から石水院経蔵にまとめられ、法鼓臺聖教も石水院経蔵やその他の僧房に移された。

特に、室町期まで高山寺の中核をなした方便智院(定真開基)には、明恵、定真以下歴代の書冊が集積された。方便智院の収蔵目録が、

- d 『方便智院聖教目録』(1484以降、高山寺典籍文書綜合調査団2002所収。)

である。

第二次の収蔵整理は寛永年間(1628-44)に始まる。石水院経蔵を顕・密の二室に分け、顕経蔵には『高山寺聖教目録』収載分を収め、密経蔵には『高山寺経蔵聖教内真言書目録』掲載書を中心とする真言書、ならびに法鼓臺聖教、方便智院聖教が収められた。

寛永期の整理で各聖教に経蔵名と函番号が記された。〈顕経蔵〉所蔵分には「甲」「乙」を付し、〈密経蔵〉所蔵分には「真」

(真言書)「臺」(法鼓臺)「東」(東坊方便智院)を付した。

つまり、表紙に「甲」「乙」とあればa『高山寺聖教目録』に記載されている可能性が高く、「真」とあればb『高山寺経蔵聖教内真言書目録』に、「臺」とあればc『法鼓臺聖教目録』に、「東」とあればd『方便智院聖教目録』にそれぞれ掲載されていると考えてよい。それに続く数字は箱番号をあらわす。例えば、「臺十五」は法鼓臺聖教の第十五箱を指し、表紙にこの文字を持つ書物は『法鼓臺聖教目録』の第十五に記載されていると推測できる。

目録は整理の度に作成された為、上記の目録はそれぞれ新旧異なったバージョンを持つ(基本的には、鎌倉期の古目録と江戸期の新目録の二種)。また、上にあげたもの以外にも、まだ数種の目録がある。

3 京都大学所蔵高山寺旧蔵本

現在までに管見に及んだ高山寺旧蔵本として、以下の七種をあげることができる。

古写経断簡 谷村文庫 1-23コ5貴

一卷、卷子本、断簡(巻首・巻尾を欠く)平安時代中期写

四分律比丘含注戒本 谷村文庫 1-23シ6貴

三帖、折本装、巻首「高山寺」朱印、上巻巻尾「銭塘洪先刀」

成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌 谷村文庫 1-23シ7貴

一卷、尾欠、卷子本、本文三行目中央に「高山寺」朱印、院政期初期写

佛説八關齋経 谷村文庫 1-23ハ1貴

一帖、折本装、巻首「高山寺」朱印、紹興30年跋刊(南宋1160)

梵網経盧舎那仏説心地法門品菩薩戒本

谷村文庫 1-23ホ1貴

一帖、折本装、巻首(扉絵の部分と巻序の部分、二箇所)・巻尾「高山寺」朱印、北宋版か

曼陀羅次第法 谷村文庫 1 - 26マ1貴

一帖、粘葉装、巻首「高山寺」朱印、鎌倉時代建久四年写、外題「高尾」

薬字抄（香字抄） 京都大学附属図書館 7 - 02ヤ1

一卷（巻三） 卷子本、首わずかに欠、巻首紙背「真第九箱」（朱） 巻首「高山寺」朱印、外題「真第九箱 / 薬字抄 高山寺」、院政期十二世紀写、奥書（朱・別筆）「永萬二年九月九日丹波抄五巻之内也」

他に、近世以降のものとして、

高山寺図像鈔目録 京都大学附属図書館 1 - 20コ3貴



一冊、袋綴、巻首「高山寺」朱印、江戸時代中期写

があり、また、寺内子院の一つ、善財院の旧蔵書がある。

三部經傳受聞書 京都大学文学部 国文・寿岳文庫 7 C 4

一冊、袋綴、原表紙裏「梅尾 / 善財院」、片仮名交り文、室町時代応仁二年（1468）写

高山寺旧蔵本は谷村文庫に多く蔵されていることがわかる。谷村文庫とは、故谷村一太郎氏の旧蔵書であり、氏が新村出博士と姻戚関係であったこともあって、氏の没後、昭和十七年に京都大学附属図書館に寄贈されたものである。古写経を中心に貴重な典籍を多く含む。

上記の内、は宋版である。『四分律比丘含注戒本』も、上巻奥付に「銭塘洪先刀」とあり、そのため『谷村文庫目録』に宋刊本というが、紙質が中国のものとは思われない。龍門文庫に同版本（上巻のみ）がある（川瀬一馬『龍門文庫善本書目』）。同書目が「泉涌寺版の中に算へらるべきものであらう」という通り、律の覆宋版であるから、泉涌寺版の可能性はある。『佛説八關齋經』は陰刻大字の南宋版である。京大所蔵本の中では『梵網經盧舎那仏説心地法門品菩薩戒本』が白眉であろう。見事な扉絵があり、宋版としても古い。北宋版

であろうか。「敬」字に欠筆が見られる。また、あまり密ではないが、角筆によって加えられた訓点（仮名、合符、句読、返点）がある。



図2 『梵網經盧舎那仏説心地法門品菩薩戒本』巻首

以上は、「高山寺」朱印の存在などによって、高山寺旧蔵が予測されるものである。裏付けを得るためには、さらに高山寺経蔵古目録との対応を調べる必要がある。というのも、その価値の高さから、高山寺本を語る偽造書が皆無ではなく、朱印の偽印も存在するからだ。

『古写経断簡』は断簡であり、高山寺印もないため、高山寺旧蔵を証明できない。裏書「此断簡是高山寺旧什賣佐々木山城 / 守奉納大乘経也」によって、高山寺旧蔵と考えられている。このように断簡であったり、『四分律比丘含注戒本』、『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀軌』のように、特に珍しくない書物で、表紙が改められている場合には、目録との対応を指摘することが難しい。

一方、『佛説八關齋經』の場合、後補表紙であり、経蔵名・箱番号を確認できないものの、特定が可能である。というのも、高山寺旧蔵本についていえば、『佛説八關齋經』は目録に一箇所のみ記載され、現存書は一部のみなので、一対一の対応を認めることが出来るからであ

る。すなわち、『高山寺聖教目録』に

八關齋經一卷（第七十四〔乙ノ〕15）

とあって、それ以外の目録には同書名の記載がない。そして、高山寺に同書は現存せず、山外にあることも聞かない。とすれば、京都大学所蔵のこそが、おそらくこれに相当すると強く推定できる。もし、に原表紙があれば、「乙」「七十四」の文字が記されていたはずだ。

『梵網經盧舎那仏説心地法門品菩薩戒本』も、後補表紙であるが、高山寺に『梵網經盧舎那仏説心地法門品菩薩戒本』は現存せず、『高山寺聖教目録』に

梵網經戒本一卷（第二十四〔甲ノ〕1）

梵網經戒本一卷（第七十四〔乙ノ〕13）

とあるので、どちらかが該当すると思われる。

『曼陀羅次第法』については、原表紙が存在し（図3）、右上に「臺第[三十]」、題箋に「高尾」とある。「臺」とあるので、『法鼓臺聖教目録』を見ると、たしかに第三十に、

高尾一帖（第三十47）

と見えることから、同定できる。



図3 『曼陀羅次第法』表紙

4 薬字抄（香字抄）

最後に、『薬字抄（香字抄）』について述

べる。この資料は冒頭で触れた公開展示会に出陳されたものである。展示会の図録に解題を物したが、ここでは、目録との関係につなげて、解題に書ききれなかったこと若干を補足する。

本書は外題に「薬字抄」とあるが、内容は各種の香について、その性質、効能、産地、用法などを記載した本草系の類書である。僚巻の巻一（大東急記念文庫蔵）の外題に「香字抄」とあることなどから、『香字抄』巻三と認められている。平安時代中期以降、俗家における薫物、御修法の盛行に伴い、また仏家では勤行、法会に香が使用され、護摩の料となることから、香に関する知識が必要とされた。一般的な本草書に飽きたらず、香薬の専書が求められたものである。記述は『開宝重訂本草』（李昉等撰、開宝七年（974）刊）を中心に、諸書からの引用がある。

巻首紙背及び外題に「真第九箱」と見える。同じく高山寺旧蔵の『香字抄』巻一（大東急記念文庫現蔵）には「真第十一箱」とある。寛永年間に行われたと推測される箱番号の記入には一部錯誤があったらしく、鎌倉時代写の『高山寺経蔵聖教内真言書目録』では「真第十一箱」に「香薬抄三巻」と見え、「第九箱」に記述はない。寛永十年（1633）写の『高山寺経蔵聖教内真言書目録』には「一卷欠」とあるから、その時点ですでに巻二を欠いていたようである。

本書の奥書には「永萬二年九月九日丹波抄五巻之内也」とある。丹波家は『医心方』を著した丹波康頼（912-995）以来、医薬の家として知られ、この書も「丹波抄」と呼ばれることがあったことがわかる。また、「五巻之内」とあることから、うち三巻が『香字抄』、二巻が『薬字抄』に相当すると推定される。

「丹波抄」の名は高山寺の他の古目録にも見える。『禅上房書籍欠目録』（鎌倉時代中期写、高山寺典籍文書総合調査団2002所収）第四六に次のようにある。

「信西入道」(朱)

丹波抄五巻 丹波宿祢以来之抄也今為類聚加
新注也

本云永万二年九月以相公入道之本更補欠了
東寺沙門勝賢

香抄二 薬抄三 合為五帖

この目録は明恵晩年の弟子である禅上房(禅浄房)が所持していた書籍の内、何らかの理由で欠失したものの一覧である。したがって、「丹波抄五巻」は現存しない。上記は目録などに摘記されていた丹波抄写本の奥書を転記したものである。

禅上房が所持していた書籍は、その灌頂部分が『聖教目録〔禅浄房ノ灌頂〕』(現存、高山寺典籍文書綜合調査団2002所収)としてまとめられ、それ以外が『聖教目録〔禅浄房ノ書籍〕』(逸書)のような形で収録されていたと考えられる。後者の欠本部分に相当する目録が『禅上房書籍欠目録』であろう。

『禅上房書籍欠目録』の記述は『香字抄』の成立と伝写の経緯について、また、本書奥書に見られる「永萬二年九月九日」の意味について考えさせる。記述を信じれば、丹波宿祢康頼以来、丹波家には代々書き継がれた香薬の書があった。その集成者は名医として知られる丹波雅忠(1021-88)などが想定できる。それを信西(相公)入道藤原通憲(1106-59)が類聚し、新しい注を加えた。通憲の息である勝賢が、通憲の没後、永萬二年(1166)九月にその欠をさらに補ってできたものが丹波抄であるということになる。丹波家の家説を基礎としながらも、丹波抄の最終的な成立には通憲親子の関与が深いことになる。

たしかに、『通憲入道蔵書目録』にも、

大観本草目録 大観證類本草 薬證病源歌
一結 合薬方一帙(以上、第三八櫃)

大観本草下帙 医書要字二巻 薬種略決
要薬秘方 本草和名下(以上、第三九櫃)

のような本草書、医学書、薬学書が見えるから、

その様な所為は十分にありえたことである。

したがって、本書奥書の「永萬二年九月九日丹波抄五巻之内也」は、「この書は永萬二年九月九日に勝賢が著した丹波抄五巻の一部(香字抄部分)である」という意味であろう。従来、この奥書は読了識語と考えられてきた。すなわち、「永萬二年九月九日」は読了の日時であり、本書の書写・成立はそれよりのさかのぼると考えられていたのであるが、以上の考察に従えば、「永萬二年」は成立年であり、本書の書写は逆にそれよりも降ることになる。

目録は寡黙に見えて、意外に多弁である。

本稿は2002年12月25日に開催された第六回・日中韓版本研究会における口頭発表に基づく。研究会の席上、貴重なご意見・ご教示を賜った諸賢に深謝する。

<参考文献>

奥田 勲 1985「高山寺経蔵とその古目録について」(『高山寺経蔵古目録』)

高山寺典籍文書綜合調査団 1985 『高山寺経蔵古目録』(東京大学出版会)

高山寺典籍文書綜合調査団 2002 『続高山寺経蔵古目録』(東京大学出版会)

宮澤俊雅 2002「高山寺経蔵とその古目録について」(『続高山寺経蔵古目録』)

(おおつき まこと)

ちいさいけれど多岐多様な資料を所蔵

教育学研究科・教育学部図書室 図書掛長 山本 修

本部構内、附属図書館北側にある4階建ての小さな1棟、それが教育学部本館です。その本館西側入口からはいったところに、図書室があります。閲覧席数12席、京都大学の小さな学部の小さな図書室です。

教育学部は、文学部「教育学教授法講座」を母体にして1949(昭和24)年に設置され、1998(平成10)年に大学院教育学研究科へと発展してきました。その中で図書室は「文学部移管図書」を基礎にして、1952(昭和27)年に設けられました。

現在、大学院2専攻(教育科学、臨床教育学)、学部1学科3系(現代教育基礎学、教育心理学、相関教育システム論)のもと、それらの資料を中心に、多岐多様な14万冊を蔵書しています。

書庫は学部本館地階に、哲学、心理学、宗教、社会学、教育学、医学の各分野の図書と、国内雑誌、外国雑誌、紀要類を収納しています。ここは開架式で、他学部学生を含めて、誰でも自由に入って資料を直接手にとって見ることができます(学外の方は除きます)。しかし収納はすでに満杯で、書架の天板の上にも配架している状態です。そのため、昨夏、書庫内の大移動を行い、現在、総記、図書館学、歴史、政治、法律、経済、統計、自然科学(医学を除く)、工学の各分野と児童文学は別室の閉架式書庫に、また、産業、芸術、語学、文学(児童文学を除く)の各分野と特殊文庫は、総合博物館内閉架式書庫に、それぞれ分収納しています。この閉架式書庫には限られた方しか入庫できず、利用者の方々にたいへんご不便をおかけしています。閉架式図書の利用につきましては、閲覧室カウンターでお申込みいただければ、担当者が取り出しに行きますが、総合博物館内書庫収納の図書につきましては、お申込みの翌開室日

13時以降の利用になります。

また、教育学部には次のような特殊文庫を備えています。

- 「教育課程文庫」(10,276冊)：旧文部省からの移管図書。主に戦後日本における小・中・高校の教科全般にわたる教科書類。
- 「小西文庫」(489冊)：本学第9代目総長であった小西重直博士の旧蔵書。1940年代以前の我が国における教育原理に関する資料が多い。
- 「池田文庫」(393冊)：元教育学部教授・池田進博士の旧蔵書。比較教育学全般にわたる資料。
- 「高橋文庫」(324冊)：高橋俊乗博士の旧蔵書。江戸時代末期を中心とする近世教育思想史資料。
- フランス教育史コレクション(225冊)：19世紀および20世紀前半の女子教育関連図書を中心に、古くは18世紀後半の教育論から1980年代の研究書までである。1988年購入。

なお、当図書室の開室は、通常月曜日から金曜日の午前9時から午後5時までで、休業期を除き昼休み時も開いています。京都大学の学生証、職員証等、身分証で利用できます。

(やまもと おさむ)



智慧の樹、生命の樹：Das Licht und das Recht

総合人間学部・人間・環境学研究科 松田 泰 代

朝、糺の森を通りぬけ、夕もしくは夜、同じ道を逆方向に通り返けてゆく。春の柔らかい光の中を、夏の強い陰影のある土の上を、秋の朝の霧に包まれて、冬の夜の澄める月の下を、四季折々、朝夕、様々な森が楽しめる。同じ森であっても、万物の営みやそれを味わう私という個の変化によって様々な森が存在する。森は分け入ったものを包容し、自らも変容するが、アイデンティティは失わない。静かな、けれども正確なリズムで時が流れている。森を散策する人は、その空気に触れ癒され安らぎを感じる。

図書館のベストセラー複本購入問題について、馬場俊明氏は図書館人・利用者の立場から明解な光を当てた⁽¹⁾。そして、その論文の中で図書館という森について論じ、育てようと提唱した。心動かす素晴らしい文章であった。この問題で、知識人といわれている人々が主張した考え方や経済効果にのみに集約してしまう感性を寂しく思い、また、自分のポジションで物を見、考え、判断することなしに、形成されつつある既成概念に捕まってしまう人に憂いを感じていた。だから、この論文を読んで救われた。森から享受したものに感謝することなく、森を守ろうとは思わない、搾取だけの世界はあまりにも物悲しい。人間の品性とは、徳とはなんだろうか。

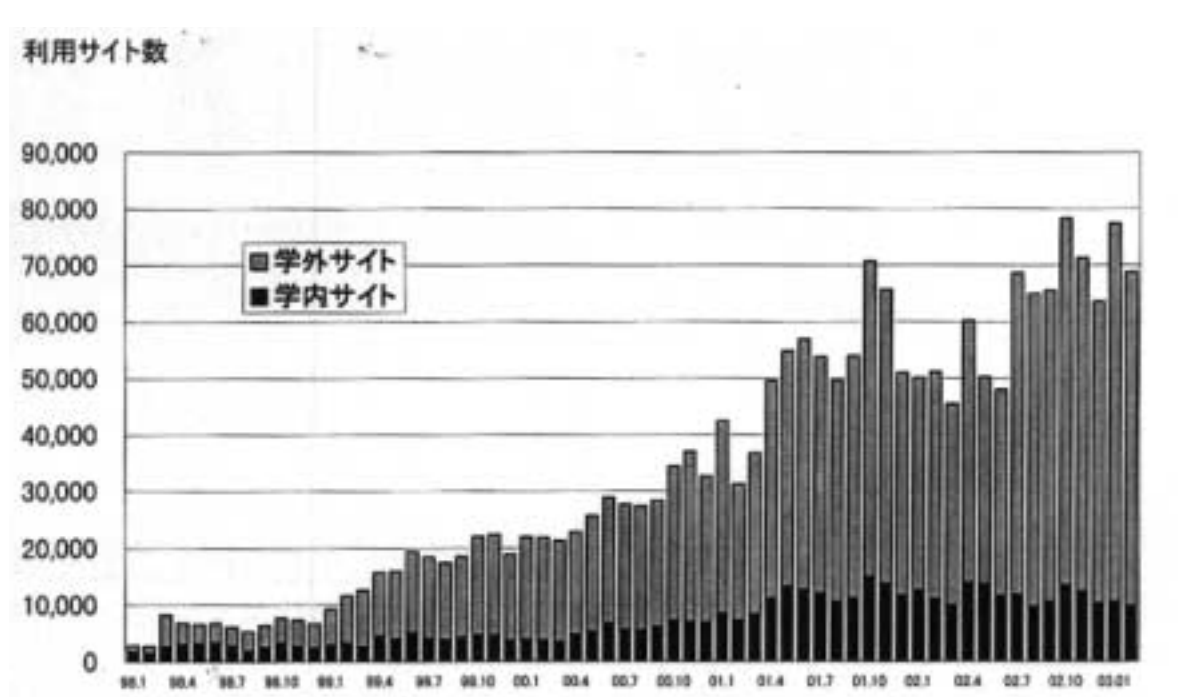
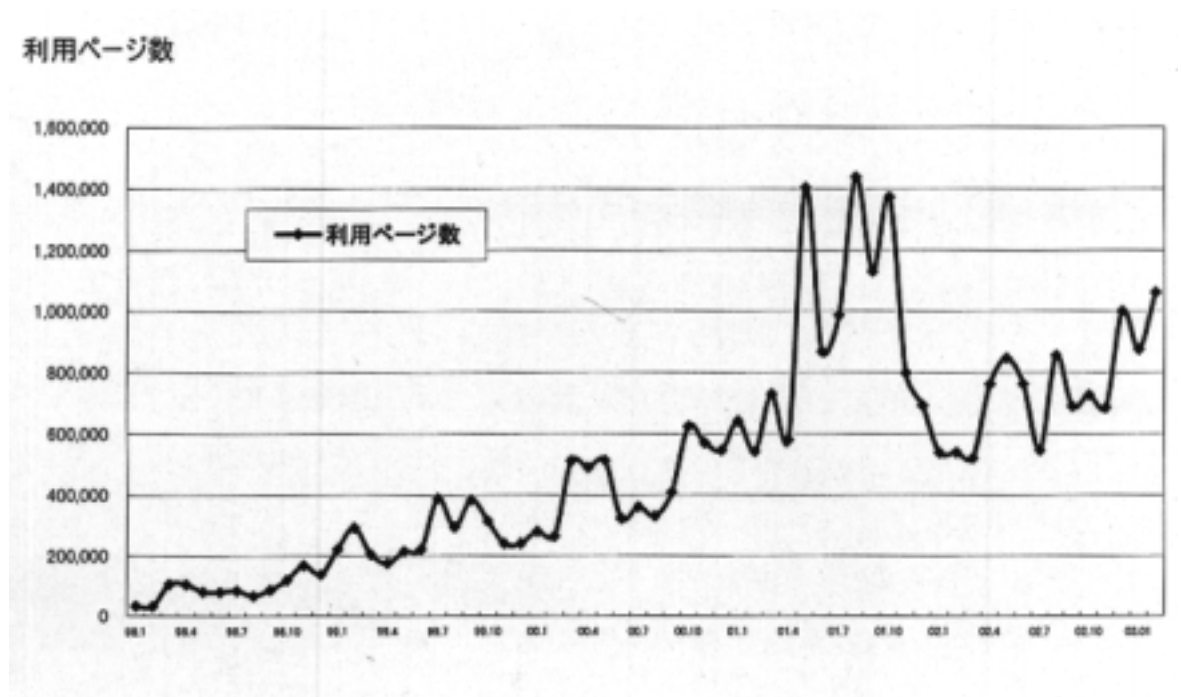
ミヒャエル・プレト・リウス(1571 - 1621)は、『音楽大全』を著したことによって、美学史上不朽の位置を占めた音楽美学者といわれている。『楽記』⁽²⁾と比較して、キリスト教の神を通して光を当てたか聖人君子を通して光を当てたかの違いで、本質は同じことを語っているように感じる。プレト・リウスは、人間の目的は何かを考察し、そこから音楽を位置づけた。「人間の目的は二つある。すなわち、ひとつには、真理の探求ないし認識、もうひとつは、徳の選択

徳を選びとって身に体することである」と述べた。旧約聖書の創世記をもとに、前者を智慧の樹、後者を生命の樹とし、ルターの訳から「das Liecht vund Recht」⁽³⁾と問いあらわした⁽⁴⁾。正しさというのは調和のとれた完全性と理解していただきたい。図書館は、智慧の樹、生命の樹どちらも大切に育てなければならない。

図書館は、現在から未来の利用者のために存在する。人類千年の計であって欲しいと願う。大学図書館は、その大学で教育を受ける、授ける、研究する人のために運営され、必要と欲し門をたたくすべての人に開かれている。人環・総人図書館は、全学共通科目を履修している学生のための図書館という機能も有している。京都大学の門をくぐった若い人々に図書館という森を楽しんでいただきたい。そのためにも、まず図書館へ足を運んでもらえるよう努力している。一度、読書する楽しみを知った人は、自ら図書館という森で遊びいろいろな発見をしていくだろう。況んや、解は一つだけではなく、時にはなかったり多くの解が存在するということをや。人環・総人図書館は、研究書を充実させつつ、学生のための図書館という顔を失わないでいたい。新宮秀夫名誉教授は、「文芸作品の有難さは、説教ではなくて仮想の世界ながら幸福のあり方を体験させてくれるところにある」「多くの作品を読んだおかげで、人生を何十回、何百回も生きることができた」⁽⁵⁾と述べている。古えにも通じ、現代にも明るい人であるために本を読もう。(まつだ やすよ)

(1) 『出版ニュース』no.1959(2003.01) p.10-14 (2) 『礼記』第十九 (3)現代ドイツ語では「Das Licht und das Recht」(4)今道友信『精神と音楽の交響』(音楽之友社、1997) p.95-114 (5) 『幸福ということ』(日本放送出版協会、1998) p.120

電子図書館利用状況（1998年1月～2003年2月）



図書館からのご案内

新入生歓迎オリエンテーション

附属図書館の施設のご案内や、基本的な本の探し方・借り方などをご説明します。

新入生の方はもちろん、新大学院生や初めて附属図書館に来られる方もお気軽にご参加ください。

日時：4月7日(月)~11日(金) 12:15~12:45

場所：附属図書館3階AVホール

文献検索講習会

*データベース定期講習会

附属図書館で週1回程度開催。予約は不要です。都合のいい時間にお越しください。研究生、聴講生、科目履修生等の方もお気軽にご参加ください。

日時：図書館ホームページ、メールマガジン、LSN、ポスター等に掲載

集合場所：附属図書館1階7番カウンター前

- ・OPAC基礎講座 図書や雑誌の所在情報の検索方法
- ・Web of Science講座 外国雑誌論文の探し方
- ・雑誌記事索引講座 日本語雑誌論文の探し方
- ・電子ジャーナル講座 電子ジャーナルの利用方法、利用上の注意点

*個別対応講習会

ご希望に応じた内容で、オーダーメイドの文献検索講習会を行います。

ゼミ・授業の1コマとして、講座・学科・学部等のオリエンテーションの一環として、また有志の勉強会として等、多様なニーズにお応えします。

グループ単位でお申してください。日時、内容、開催場所はご希望により調整します。

内容：図書館利用案内、図書・雑誌の探し方、雑誌文献検索方法、電子ジャーナル利用法、新聞記事や特許情報の入手方法、その他専門分野の文献検索法など

申込先：参考調査掛（内線：2636） e-mail: sanko@kulib.kyoto-u.ac.jp

または附属図書館1階7番カウンター

全学共通科目「情報探索入門」の開講

附属図書館では今年も全学共通科目「情報探索入門」を開講します。

論文・レポートを書くための文献・情報収集や情報活用技術を演習によって習得することが主な目的です。6人の教官のリレー形式で行われ、演習には図書館司書が協力します。

対象回生：2・4回生

開講時期：前期（4月11日~7月11日） 金曜5限（A・B群 2単位）

附属図書館メールマガジン「Library Service News」

図書館からのお知らせや、新規サービス等の最新情報を迅速にお送りしています。学内外を問わず、どなたでも登録できます。まだ登録されていない方は、ぜひご登録ください。

登録方法等詳細は、附属図書館ホームページ<http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/homejm.html>をご覧ください。

（参考調査掛）

教官著作寄贈図書一覧 (平成14年12月～平成15年2月)

所属等	寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
名誉教授	佐野 晴洋	佐野晴洋写真集 SEIYO'S CAMERA EYE 2002-November	佐野晴洋	2002
総合人間学部	西脇 常記	史通内篇	東海大学出版会	1989
総合人間学部	西脇 常記	史通外篇	東海大学出版会	2002
総合人間学部	西脇 常記	Chinesische und mandjurische Handschriften und seltene Drucke : T.3	F. Steiner	2001
総合人間学部	富田 恭彦	科学哲学者 柏木達彦の秋学期	ナカニシヤ出版	1998
総合人間学部	富田 恭彦	科学哲学者 柏木達彦の冬学期	ナカニシヤ出版	2001
総合人間学部	富田 恭彦	科学哲学者 柏木達彦の番外編	ナカニシヤ出版	2002
総合人間学部	前川 玲子	アメリカ知識人とラディカル・ビジョンの崩壊	京都大学学術出版会	2003
文学研究科	苧阪 直行	Neural Basis of Consciousness	John Benjamins Pub. Co.	2003
文学研究科	苧阪 直行	日本心理学会第64回大会発表論文集	日本心理学会第64回大会準備委員会	2000
教育学研究科	川崎 良孝	民主主義と図書館	日本図書館研究会	1994
教育学研究科	川崎 良孝	図書館裁判を考える	京都大学図書館情報学研究会	2002
教育学研究科	田中 耕治	指導要録の改訂と学力問題	三学出版	2002
教育学研究科	渡邊 洋子	生涯学習時代の成人教育学	明石書店	2002
経済学研究科	木島 正明	Stochastic Processes with Applications to Finance	CHAPMAN & HALL/CRC	2003
化学研究所	野田 章	Ion Beam Cooling Toward the Crytsalline Beam	World Scientific	2002
霊長類研究所	松沢 哲郎	進化の隣人 ヒトとチンパンジー	岩波書店	2002

シネマ・クラシック

巴里の空の下セーヌは流れる (1951 仏) ジュリアン・デビエ監督作品	4月10日(木) 14:00～15:55 16:00～17:55 (4月3日休館日のため10日に変更)
汚れなき悪戯 (1955 スペイン) ラディスラオ・バホダ監督作品	5月1日(木) 14:00～15:30 15:35～17:05
スリ (1960 仏) ロベール・ブレッソン監督作品	6月5日(木) 14:00～15:15 15:20～16:35
アパッチ砦 (1948 アメリカ) ジョン・フォード監督作品	7月3日(木) 14:00～16:10 16:15～17:25
森は生きている (1956 ソ連) アニメ イワン・イワノフ・ワノ監督作品	8月7日(木) 14:00～14:50 14:55～15:45
橋 (1959 ドイツ) アニメ ベルハルト・ヴッキ監督作品	9月4日(木) 14:00～15:40 15:45～17:25
アイアンホース (1924 アメリカ) ジョン・フォード監督作品	10月2日(木) 14:00～16:00 16:05～18:05
シベリヤ物語 (1947 ソ連) イワン・フィリエフ監督作品	11月6日(木) 14:00～15:55 16:00～17:55
素晴らしき哉、人生 (1946 アメリカ) フランク・キャブラ監督作品	12月4日(木) 14:00～16:10 16:15～18:25

上映場所：附属図書館3階AVホール

図書館の動き

平成14年

- 12月13日 近畿地区国立大学附属図書館事務部課長会議（於：神大）
中国・西安交通大学副学長等8名来館、貴重書及び施設見学
- 16日 「日本研究情報専門家研修」韓国、中国、カナダ、米国等研修生等10名来館
- 19日 附属図書館防火防災訓練
- 25日 課題解決プロジェクト・チーム会議（於：東大）

平成15年

- 1月8日 平成14年度第1回研究開発室員報告会：教育学研究科 川崎良孝教授
- 14日 宇治分館運営委員会
- 16日 電子ジャーナル・タスクフォース会議（於：東大）
- 21日 第4回外国雑誌等に関する専門委員会
平成14年度第5回商議會
- 22日 韓国韓南大学生35名見学来館
- 23日 平成14年度国立大学附属図書館事務部長会議（於：岐阜）
- 28日 エジンバラ大学院生電子図書館等調査来館
課題解決プロジェクト・チーム会議（於：東大）
- 31日 図書系事務連絡会議
- 2月7日 課題解決プロジェクト・チーム会議（於：東大）
- 10日 韓国大学生協代表団15名来館
- 13日 平成14年度第2回選書分担商議員会議
平成14年度第1回電子図書館専門委員会
- 14日 学術情報発信に向けた図書館機能改善連絡会（於：NII）
国際交流基金サンパウロ事務所図書館司書ナカタ・グレース・キオカ氏来館
- 18日 平成14年度京都大学附属図書館第3回講演会（105名参加）
- 19日 平成14年度第2回研究開発室員報告会：薬学研究科 金子周司助教授
- 24日 韓国新韓高校生80名見学来館
- 27日 平成14年度第6回商議會

目次

「学び」の世界	1
附属図書館について思うこと	5
京都大学所蔵の高山寺本 書物と目録	6
ちいさいけれど多岐多様な資料を所蔵	11
智慧の樹、生命の樹：Das Licht und das Recht	12
電子図書館利用状況	13
新入生歓迎オリエンテーションのご案内	14
教官著作寄贈図書一覧/シネマ・クラシック	15
図書館の動き	16

編集後記

平成11年4月より静情の編集委員をしましたが、あっという間に2年間がたちました。委員の任期が切れるので、言うのではありませんが、「静情」をもっと多くの人に読まれるような館報にしてほしいと思います。 T . K .